羊と鋼の森 (4)

「板鳥さん」
震えそうになる声を抑える。
「調律って、どうしたらうまくできるようになるんですか」
聞いてから、ばかな質問だと思った。うまくどころか、調律の基本さえできなかった。半年間は先輩について見て覚える。そういう決まりなのに、勝手に破ったのは自分だ。※もう少しのところでふりかえって、亡き妻が冥界へ戻ってしまったオルフェウスの神話を思い出した。ほんとうにもう少しだったんだろうか。近くに見えて、きっとほんとうは果てしなく遠かったのだろうと思う。
「そうですねぇ」
板鳥さんは考え込むような顔をしてみせたが、実際に考えていたのかどうかはわからない。板鳥さんのつくる音が、ふっと脳裏を掠めた。初めて聴いたピアノの音。僕はそれを求めてここへきた。あれから少しも近づいてはいない。もしかしたら、これからもずっと近づくことはできないのかもしれない。①初めて、怖いと思った。鬱蒼とした森へ足を踏み入れてしまった怖さだった。
「いったいどうしたら」
僕が言いかけると、
「もしよかったら」
板鳥さんがチューニングハンマーを差し出した。チューニングピンを締めたり緩めたりするときに使うハンマーだ。
「これ、使ってみませんか」
差し出されたまま柄を握った。持ってみると、ずしりと重いのに手にひたっとなじんだ。

「お祝いです」
お祝いという言葉の意味を計りかねて、②怪訝そうな顔をしていたのだろう。
「ハンマーは要りませんか」
聞かれて、思わず、要ります、と答えていた。森は深い。それでも③引き返すつもりはないのだとはっきり気づいた。
「すごく使いやすそうです」
「すごく使いやすそうなだけでなく、実はすごく使いやすいのです。よかったらどうぞ。私からのお祝いです」
板鳥さんは穏やかに言った。
「何のお祝いですか」
こんな日に。記憶にある限り、僕の人生でいちばんだめだった日に。
「なんとなく、外村くんの顔を見ていたらね。きっとここから始まるんですよ。お祝いしてもいいでしょう」
「ありがとうございます」
④お礼の語尾が震えた。板鳥さんは僕を励まそうとしてくれているのだ。森の入口に立った僕に、そこから歩いてくればいいと言ってくれているのだ。

（宮下奈都『羊と鋼の森』文藝春秋　による）

※もう少しの～…亡くなった妻を取り戻すために冥界にいったオルフェウスが、冥界を出るまで振り返ってはならないという条件を破ったために妻を連れ帰ることができなかったというギリシャ神話の話を指している。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「初めて、怖いと思った」とあるが、どういうことを怖いと思ったのか。適当なものを選びなさい。

ア　半年間は先輩のもとで見て覚えるという決まりなのに、その決まりを勝手に破り調律がうまくいかなかったこと。

イ　板鳥さんの調律するようなピアノの音を、自分は決して調律することができるようにならないのではないかということ。

ウ　調律について板鳥さんのようになりたいと思ってはいるものの、自分の悩みをうまく言葉にすることができないこと。

〔　　〕

(2) ——線②「怪訝そうな顔」とあるが、これはどのような顔か。適当なものを選びなさい。

ア　板鳥さんが自分の問いに答えてくれないことに不満な顔。

イ　板鳥さんに近づくことができるのか不安に感じる顔。

ウ　板鳥さんの発言の意図がわからず、不審に思う顔。

〔　　〕

(3) ——線③「引き返すつもりはない」とはどういうことを表しているのか。適当なものを選びなさい。

ア　これからは調律を先輩について見て覚えるようにし、もう二度と決まりを破るつもりはないということ。

イ　お祝いという言葉の意味は計りかねるものの、ハンマーを受け取らないつもりではないということ。

ウ　自分も板鳥さんのつくる音に近づけるよう、調律の道をあきらめるつもりはないということ。

〔　　〕

(4) ——線④「お礼の語尾が震えた」とあるが、このときの「僕」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　優しく励ましてもらったことで、かえって自分に対するなさけない気持ちを強く感じ、くやしさをかみしめている。

イ　憧れている板鳥さんが、ここから調律の道を進んでくればいいと自分を励ましていることに気づき、感極まっている。

ウ　勝手なことをしたために叱られるのではないかと不安だったが、穏やかに励ましてもらったので、緊張がほぐれている。

〔　　〕